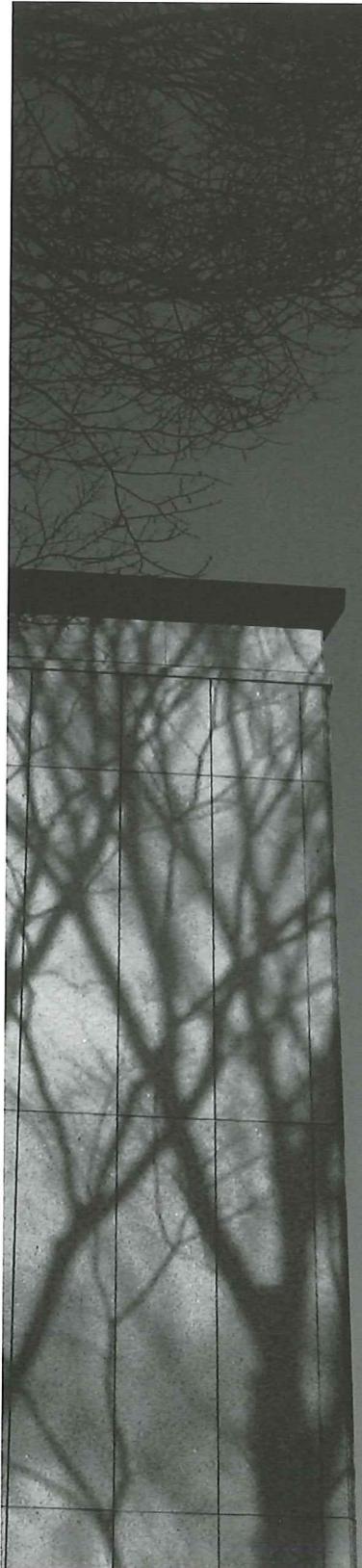


熟議を欠く多數決は
本当に民主的か

森岡清美

morioka kiyomi



白川党六人衆

白川党事件として知られる明治二十九（一九〇）年の真宗大谷派寺務革新運動は、周知のように清沢満之と同志たち六人が首唱者となつて起こしたものである。清沢関連の資料の詳しい検索が進む一方、他の五人については、稲葉昌丸^{まきまる}が後年大谷派の宗務総長や大谷大学学長を勤め、「蓮如上人遺文」「蓮如上人行実」といった文献学的な優れた研究業績を公表したことで、真宗関係者や真宗研究者に知られている以外、ほとんど明らかになつていらない。

当時の新聞によると、白川党六人衆の総帥は言うまでもなく清沢であるが、帝國大学出身者ばかりの間で唯一人東京専門学校（早稻田）政治科出身の井上豊忠が軍師の役割を演じたと言える。そこで私は井上関連の資料を求め、幸い曾孫に当たる井上道弥氏のご厚意で三〇余年にわたる日記と大量の関連遺文を利用することにより、白川党的こと、六人衆のこと、また白川党的檄に応じて集まつた人々の大谷派事務革新全国同盟会のことなど、かなりわかるようになつた。

清沢・稲葉・今川覚神の三人は、本山の育英教校か教師教校の同時期の生徒として、一〇歳台後半、明治一〇年代に親しくなつてゐる。他方、井上は二〇歳ごろ、京都と東京の学校で清川円誠^{えんじょう}および月見覚了^{かくりょう}と親しくなり、

以後兩人と親交を結んだ。このように一方で清沢・稲葉・今川のトリオ、他方で井上・清川・月見のトリオがあり、清沢と井上が明治二十（一八九二）年二月に偶然会つて意氣投合したことで、六人衆の原型ができた。最年長の今川が一八六〇年、最年少の稲葉が一八六年、清沢・井上・清川は一八六三年、月見は一八六四年の生まれで、同じ六年幅のコホートに属し、同じ時代環境のなかで成長してきた人たちである。

清沢と井上の初対面

初対面の記録は、井上日記よりも、井上が清沢没後もなく書き始めた「護法家トシテノ清沢満之師ヲ懷フ」と題する手記に詳しいので、それに拠つて述べる。井上は明治二十五年一月、本山寺務所（宗務所）の典礼調査係に任じられ、併せて大学寮講習科教授補として帝國憲法の講義を担当することになつたので、出講時間を打ち合わせるため、大学寮副監の教学部錄事太田祐慶をその自宅に訪ねた。案内により二階の座敷に進むと先客があつて、木綿の白衣に粗末な麻の衣装を着用した小さい色黒の瘦せた所化^{よけ}が坐つていた。こちらが大学寮および中学校の教授・清沢満之氏ですとの紹介で初めて相知つたのである。

かねて南条文雄^{ぶんゆう}から、清沢・稲葉両氏が新法主の教育を担当していることは暗夜の燈火

であると聞いていたので、清沢にその勞を感謝したところ、清沢は始めのうちはしきりに謙遜していた。しかし井上の愛山護法の志には、立身出世の野望が潜んでいるのではないかと疑つたためか、だんだん調子が変わつて、ついには、自己の修養もできていないくせに、法主のためとか、一派のためとか、教法のためとか言つてゐる者は、皆名利の醜徒である、と攻撃してきた。井上は堪らず反論に及び、はしなくも衝突に至つた。このとき清沢は行者の修行の最中で、すでに中学校長を辞職し、いよいよ声聞主義の修行に全力を傾注するためその準備中であつた。他方、井上は新たに宗政の職に就き、愛山護法のために身命を惜しまず猛進する決心で、その体勢を整えつつあつた。二人は頗る異なる状態にあつたため、互いに口角泡をとばして、一語は一語より激しい論争を朝の九時から午後一時まで、およそ三、四時間続けた。

傍らにあつて二人の論戦を黙つて聞いていた太田が、機をみてとろろ飯の昼食を出してくれたので、議論を一旦中止し、主客三人で会食した。議論は激烈で大いに火花を散らしたが、真心と自信から出た眞面目な議論ゆえ、兩人とも感心するところがあり、興味津々湧く思いであつた。このまま別れがたく思つた清沢は井上に、あなたのお住まいを訪ねたいが差し支えはないかと聞く。井上は喜んで応

じ、二人で手を携えて井上の下宿に帰った。

その後は話題一転して、互いに経歴を話し、感慨を述べ、抱負を語ったところ、二人の思ひは符節を合するようであった。自己修養への強い思いは清沢の表面で井上の裏面、愛山護法の願いは井上の表面で清沢の裏面である。経歴や境遇が異なるため表面に出る形式は違うが、午前の論争のような衝突は眞の衝突ではなかつたことをさどる。清話高談ますます

佳境に入る思いで、午後九時すぎまで話しつづけた。朝からなんと十二時間話し合い、話しえ疲れて終わりにしたのであろう。

清沢は、入京以来四年になるが、今日のように長話をしたことではなく、また今日のように愉快に胸襟を開いたことはない、という。感情の交流は旧識のよう、あるいは骨肉のようでも、互いに得がたい知己を得た喜びは非常なものであつた。清沢は井上と別れたその足で一里ほど離れた親友稻葉昌丸の門を叩き、井上との初対面の顛末を語り、深夜になつて自宅に帰つた。

先に述べたように、二つのトリオの中心人物の劇的対面であるから、これで白川党六人衆の原型が出現したのであるが、精神的中核となる清沢にはい強みを井上がもつていたことに注目したい。戦略を巡らし戦術を立て、これを意志的に実行させる指導力、社会運動に不可欠の的能力を、早稲田の政治科で鍛えた

井上がもつっていた。精神的中核の総帥清沢と、

戦略戦術を練り作戦を指揮する軍師井上のコソビによつて、白川党の運動もまた大谷派事務革新全国同盟会の運動も効果的に展開された。その意味で、二人の邂逅によつて運動へと成長する芽が孕まれたと言つてよいだろう。

こうして始まつた清沢と井上、そして稻葉の交友は、三日にあげぬ頻繁な訪問と数時間にわたる長話で特色づけられる。同じ京都市内の、徒歩で会える距離に住み、電話もない時代だから、それは特に不可解なことではないかもしれない。急用か、雨天でも会いたいときは人力車を雇つて訪ねる。不在中に訪ねてきたことを帰宅して知ると、こちらからそこの日のうちに訪ねる。しかも、会えば話が長い。寺務所から中学校への経費の回付が滞ることへの対策、三人の将来の方針など、相談するべき当面の問題はいくらもあつた。じつくりと納得できるまで話し合つて、打てば響くような談話を楽しみ、またそれによって励まされたことだらう。

この流儀は、明治二十六年今川が金沢から京都に転勤し、また清沢の帝大在学以来の親友沢柳政太郎が大谷派の学制改革のために招かれて、仲間に加わつてからも変わらず、さ

頻繁な訪問と長話

こうして始まつた清沢と井上、そして稻葉

の交友は、三日にあげぬ頻繁な訪問と数時間にわたる長話で特色づけられる。同じ京都市内の、徒歩で会える距離に住み、電話もない時代だから、それは特に不可解なことではないかもしれない。急用か、雨天でも会いたいときは人力車を雇つて訪ねる。不在中に訪ねてきたことを帰宅して知ると、こちらからそこの日のうちに訪ねる。しかも、会えば話が長い。寺務所から中学校への経費の回付が滞ることへの対策、三人の将来の方針など、相談するべき当面の問題はいくらもあつた。じつ

くりと納得できるまで話し合つて、打てば響くような談話を楽しみ、またそれによって励まされたことだらう。

事務革新全国同盟会の場合

明治二〇〇年、全国から上洛した各府県代表委員を中心に大谷派事務革新全国同盟会が結成されてからは、参加人数が多いので決定には多数決が採用されたが、それでも熟議してからのことであつた。その一例を同盟会解散の可否を論じた最後の総会にみよう。革新運動の機関誌『教界時言』第十三号掲載の雑録にそれが報告されているが、ここでは十一月九日の井上日記によつて紹介したい。

この日は、各府県懇意および通常議制局会議に出席した同志の賛衆が皆出席することになつてゐるので、午後二時ごろには会場の長講堂に参集する者四十五名の多數となつた。第一の議題、現當路者不信任決議案については、多少の論議の末、満場一致をもつて不信任を決議した。第二の議題、本会の将来の方針については、解散か存続か、正大な、また強硬な議論が飛び交い、かつてない大論戦が

らに二十九年寺務改革のために蹶起するべく、

一部の東京留学生や真宗大学研究科の学生が加わってきたときも、維持された。熟議してみなの納得をえたうえで決める、多数決では決めない、決まらなければ次回再議するという流儀は、人数が少ないからしたこと、できただことであろうが、それでも注目に値するのではないだろうか。

展開された。各々大谷派のため、同盟会のために、涙を注ぎ誠を尽くして論戦し、何時果てるとも思われない。そこで、清沢が議長席を離れて意見を述べた。私は両方に賛成したい、形は解散だが、精神はますます団結せねばならぬ、と。満堂これに感動したけれども、岡田・蓮田らの諸氏と乗杉・月見らの諸氏との論戦が決しない。井上は、自分は解散説である。しかし、両論とも一派を愛し本会を愛する点ではまったく変わりがない。様相は異なるが精神は一つである。解散、存続、いずれにせよ満場一致で決したい、と訴えた。そして、ついに満場一致で解散に決定した。

激しい議論の応酬により議場が混乱したが、清沢の発言で収束の方向を見出し、井上の発言が議論を決着に導いた、という筋になつて、この話どおりかどうか、『教界時言』の記事でもわからぬが、休憩のうえ再議したというから、熟議を尽くしたこと、多数決で決しようとした気配がないことは疑いえない。満場一致にこだわった感じがあるのは、最後の総会で少數者の意見を斥けたという思いを遺したくなかったからであろう。

熟議決定の教育効果

井上が寺務所に採用された年、執事・渥美契縁から大谷派の慣習法について連続の個人講義を受け、専制主義的な組織論に洗脳され

たようである。明治二十九年、改革のために有志集団を結成する準備として、同志団という名目で目的、方法、組織などにつき、想を回らしたとき、彼はその組織を専制的と規定した。一人の首領のもとにオヤコのような関係の数人の股肱^{こう}がいて、首領は股肱の協議したところを採るが、股肱は首領に服従して不惜生命の至誠を尽くす小集団である。

現実の運動においては、白川党の首領は強いて言えば清沢であろうが、専制的でなかつた。メンバーの協議の結果により清沢が決定するというのもなく、メンバーの協議によつて決まる平等な組織であつた。協議によつてたゞ活性化されるこの兄弟団は、専制的でなく平等な、民主的な集団であつた。まだ

民主主義の語はもちろん民本主義の語も知られていない時代であったが、白川党ではそれが実現されていたと言えよう。井上は熟議による民主的運営に馴染み、そのよさを体得した人間に生まれ変わった。

全国同盟会解散後、井上は郷国山形に帰り、自坊を経営して檀徒集団を指導するとともに、地域の同宗異宗さまざまな宗教集団を組織して、地域の重要な指導者になつてゆく。

その際、白川党で身につけた意思決定の流儀が、井上の指導力を説得力ある開かれたものにした。

熟議のない多数決

熟議を最近の政界では「ていねいな説明」と言うらしい。そして、「ていねい」とは、何度も回を重ねること、あるいは時間をかけることのようである。しかし本来、熟議とは異論のある案件について異なる立場を調整し、妥協点、合意点をみつけるため、とことん話し合うことではないだろうか。到底一致点は得られない難題を出してきて、「ていねいな説明」をすれば多数決で決めてよい、と決めることに突き進むのでは、民主主義は空洞化し、名のみとなろう。

今日、携帯電話やスマートフォンなどで、わざわざ訪ねてゆくこともなく、また時間を選ばず容易に情報伝達ができ、コミュニケーションを楽しむことができる。若い世代の間では手軽な通信機器の愛用に淫する傾向さえあると聞く。しかし、それでは仮に知り合いはふえたとしても、親友はできるはずがない。政治の表面で形だけの多数決が横行するのと、若年層を中心に軽く薄い付き合いが広まつたのと、熟議を欠くという点では共通の社会現象のようにみえる。白川党六人衆の流儀は、今では時代遅れのもの、再び回帰することのない「兄弟仁義」なのであろうか。

(もりおか きよみ・東京教育大学名誉教授)
著書に『真宗教團と「家」制度』創文社